
睡眠不足ではありません。

悠梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

睡眠不足ではありません。

【Nコード】

N2146V

【作者名】

悠梨

【あらすじ】

魔王ケイオスは焦っていた。この上も無く焦っていた。

魔族の王である自分は、人よりも遥かに長い時間を生きる。それゆえに生じる時間感覚の違いが引き起こしたのは

その1

ケイオスは焦っていた。それはもう心底焦っていた。

といっても、別にトイレを我慢しているわけではない。そもそも魔力がエネルギーの源である魔族は、食物を必要とはしないゆえ、排泄も必要とはしないのである（食べられないわけでもないのだが）。全ての魔物を従え、世界樹の管理を担う魔王様は、顔色も真っ青で脂汗を顎の下から滴らせて硬直し、指の一本たりとも動かさずじまつた。

彼の魔力をもつてすれば、恐ろしいものなど何も無いはずだった。今この状態にしたって、その強大な魔力にモノを言わせて相手を屈服させればいいだけの話。

しかし彼にはそれが出来ずにいた。

「ガツコウ？ 何それ」

穏やかな昼下がり。マクガルディ家を訪ねたのは、久しぶりだった。少し見なかった間にルディアスは背も伸びて、雰囲気も変わったように思う。あどけないばかりだった表情に少し落ち着きのようなものが見て取れる。

どこかへ出かけて帰宅したばかりだったのだろう、なにやらカバンを背負い、鍵を扉に差し込もうとしているところに声をかけた。

どこへ出かけていたのかと尋ね、帰って来た答えが、

「学校に行ってたんだ」

「同じくらいの子供が集まって、勉強するところだよ」

自室にカバンを置き、制服から普段着へと着替えを済ませ、白い猫を伴って庭に出てきたルディアスの手には、筆記用具。分厚い冊子とノートを数冊、庭のテーブルへ広げる。目を落として冊子に走らせていたかと思うと、羽ペンがインクツボをつつき、何事かをノートに書き始める。

なるほど、勉強か。しかしルディアスは、家庭教師とやらに勉強をみてもらっていたのでは無かっただろうか。

ふと疑問に思いつて尋ねてみると、冊子を開きながらルディアスが手をひらひらと振った。

「今でもケツヘルさんは時々来て勉強をみてくれるよ。 ていうかケイオス、前にここ来てからどれだけ経つてると思ってるの？」
言われてみて、人間の時間で考えてみる。太陽が何回のぼり、世界樹の活動周期が 云々。

傍で猫が「くああ」と欠伸した。

「…………ざつと、3年？」

「そう、3年。もう僕のことなんか忘れたかと思ったよ」

「たった3年じゃないか」

ノートの上を走っていた羽ペンが、ぴたりと止まった。落としていた視線を上げて、まっすぐケイオスを見上げてニッコリと笑った。

「そう。その3年で、父さんは病死、母さんは旅先で行方不明、僕は中等部に入學して学校に通って、クリスおばさんはお子さんが亡くなつてシヨックでお手伝いさんを辞めて、ケツヘルさんは結婚したんだよ。ちなみに僕は今、両親の遺産のおかげで何とか一人で暮らしている。」

……笑顔が、一度だけ面識のある彼の母親とそっくりで恐ろしい。カチカチに硬直したケイオスを見て、ルディアスはため息を一つつくと再びノートに視線を落とした。

「人間にとつての3年はね、キミたち魔族の3年とは重みが違つてことをよく覚えておくといいよ。僕はこれから宿題に集中しなきゃならないから、もう帰つてくれる？」

そんなことがあって、どのくらい時が経っただろうか。

あんなことがあってから、余計に彼の家へ行き辛くなった。いつそのまま、ルディアスも自分のことを忘れただろう。そう思っ、いや思い込もうとして、それでもどこか割り切れぬままに時を過ごしてきた。

魔族の寿命は長い。それを統べる魔王たる自分の寿命は、人のそれとは比べ物になるまい。

その悠久の時を過ごす自分と、ごく普通の人間であるルディアスの時間感覚が違うのは、仕方の無いことなのかもしれない。しかし案外繊細というかヘタレで打たれ弱い魔族の王サマ、先だっの出来事に対して甚く凹んでいたのだった。

同じような思いをするくらいならば、もう二度と会いに行かなければいい。いやいやしかし、彼の両親との契約が　ううう。

そんな風に悩みこんでいる間にも時間は着々と過ぎてゆくことに、彼は思い至らなかつたのだった。

その2

あれからどのくらい経つだろう。

二セ勇者が現れて売名のために魔王討伐に来て返り討ちにしてみたり、世界樹が代替わりするとかで大変な魔力の放出を余儀なくされたり、部下に叱られたり部下に叱られたり部下に叱られたりと、魔王にとってはあつという間に充実した時間が過ぎていった。タイクツする暇などありはしない。すべきことは常にある。

魔族たちが人間を害さぬよう・人間に敵意を抱かれぬよう・エルフたちと衝突せぬよう。

三者の調和を崩さぬように。父がしたような無益な戦乱を、呼び込まぬように。

直接的にルディアスを守ることは出来なくても、魔族の王として、間接的に守ることは出来る。

その日は朝から何やら森が騒がしかった。この森に棲んでいるのは上位の魔物たちばかりで、人語を解し頭も良い。人間に手を出すことは禁じているし、何の問題も無いはずだった。

世界樹の袂で、世界に満ちる魔力の調整をしていたケイオスの下に部下のフライスが血相を変えて飛び込んできたのは太陽も高くなつた頃。

「ヤバイです魔王、早く逃げて！ ていうかオレは逃げる！」

「ちょ、フライスつては落ち着いてよ。何があつたの？」

「アンタがあんな子供と仲良くするから、こんなことになつたんだつ。人間が、人間が」

話してる間にも、ざわざわざわ。嫌な気配が少しずつ森の中に充満するのを感じる。

足下から上がってくる、よく分からない寒気には覚えがある。が、その正体を思い出せないまま、ケイオスは部下をなだめる言葉を探

した。

「だから落ち着いてよフライス。人間が、何？ どうしたの？？」

「これだからバカ魔王は！ 人間がこの森にと、そこまで聴いて。」

急に、聴覚が遠くなった。

部下は相変わらず目の前で、必死に何かをまくし立てているというのに。

部下の後ろから、ゆっくりと歩いてきたその人物を目にした途端に。

「魔王討伐に来たよ、ケイオス」

ああそうか、とケイオスは納得した。

この目の前の人物は、あまりにも姿を見せなかった自分に業を煮やし、自分から会いに来てくれたのだ。

……父親の形見の剣を手に、終わりの刻をもたらすべく。

この嫌な気配は、目の前の子供 いや、今は青年か の両親と対峙したときに感じた、殺気とよく似ているのだった。

父親譲りのくすんだ金髪は、最後にあつた時よりも伸びている。一つにくくられたそれが風に揺られて、木漏れ日にキラめいている。ニッコリと笑んだ顔とは裏腹に、緑色かかった青い目は笑っていない。まっすぐにこちらを見定めてぶれない。

顎や頬から丸さの消えた、スツカリ大人になったシャープな顔立ちが母親譲りだろうか。

ああ、無事に大きくなったんだなあ。などと保護者のように思いつつ、勝手に身体が恐怖と悲しみに硬直するのを感じた。

ひどく残念だった。こんな風に対峙する日がやって来ようとは。

ルディアスと自分なら、魔族と人間の因縁を、断ち切れるんじゃないかと思ってたのに。

慌てふために逃げてゆくフライスを視界の端に認めながら、ケイオスはルディアスに負けじと引き攣る頬を無理矢理動かして、ニッコリ穏やかに微笑んでみた。

「いらつしゃい、ルディアス。来るなら連絡入れてくれたら、おもてなしが出来たのに」

「おかまいなく、魔王。馴れ合いにきたんじゃないんだ」

ふとルディアスの後ろから、もう一人人間がやってくるのが見える。大きな耳にエルフには珍しい金色の髪の毛の女。見た目はルディアスと同じくらいだが、長寿エルフならば見た目どおりの年齢とは限らない。

彼の母親に似た雰囲気のある女は、ルディアス同様まっすぐとこちらを見据えてきた。かと思えば、ズンと音を立てて杖を地面に突き立て詠唱を始める。

地面に走り始める魔法陣に目を走らせて魔王は思う。捕獲の魔法。しかしこの程度の魔法で自分を捉えることはできない

かと思つた次の瞬間に、背後に殺気を感じた。首筋に冷たい刃物の当たる感触。

彼女の目的は、魔法で魔王を捕獲することでは無かった。魔法陣で魔王の気をそらせて、ルディアスが背後に回る一瞬の隙をつくること、だった。

その3

「魔法でキミに勝てるなんて思っちゃんないよ、ケイオス。勝てるとしたら、母さんくらいのもんだ」

首の薄皮一枚のところ父親の形見の剣を当てて、面白そうにルデアスが笑う。魔法の詠唱を途中で辞めた女が慥然とした顔をしながらも反論をしないところを見ると、異論はないらしい。

顎と頬を冷や汗が伝うのを感じながら、ケイオスは思う。その通りだ、あの魔女なら自分を凌ぐほどの魔法を使って見せるかも知れない。

ということとは、この青年はきちんとわかっているのだろうか。今この状態においてすら、ケイオスが絶対的に有利な状況にあるということを。

魔法を発動するにあたって詠唱と魔法陣は必ずしも必要では無い。呪文や魔法陣は魔法を理論を交えて具体化しやすくするためであったり、体系化するためのものに過ぎない。つまり（複雑な魔法や、あえて威力や効能を上乗せしたい場合は別だが）本来は詠唱も魔法陣も必要は無いものである。

自分は魔王なのだ。ましてやここは世界樹の袂で、一番自分の力の強くなる場所である。だから言葉一つ発することも、指先一つ動かすこともなく、ただそう意図するだけで、魔法を発動させ彼らを消し炭にすることができる。

それはつまり、何のそぶりも無く、自分がただ「殺そう」と思えば即、彼らの命は無くなるということだ。
だが。

「キミは、ボクを討伐しに来たと言ったね。本気かい？」

動揺の素振り押し隠して、ケイオスは背後の人物に尋ねた。首筋に突きつけられた刃物がぴくり、と反応して動いた。

「キミは『魔法で勝てるとは思っていない』と言ったね。そのとおりだ、ボクは指一本動かすことなく魔法を発動することが出来る。そこにいるお嬢さんも魔法使いである以上、よく知っていると思う。ということは今この瞬間にも、キミたちを殺すことが出来るということだ」

「キミは僕たちを殺せないよ」

背後から聞こえてくる声から、笑みが消えた。しかし動じている素振りも無い。

「出来るのに今していない、ということは殺す気が無い。そういうことだろうか？」

「まあそうだね。でも、それはキミたちも同じじゃないのかい？」

背後を取って満足している暇があるのなら、その刃物をボクの首に容赦なく突き立てればいいんだよ」

そうしないと、ボクに殺されるかも知れないだろう？」

背後で、低く笑う気配がした。

「それは違うよ、ケイオス。キミは僕を殺せないだろう、両親との契約があるからね。でも僕はキミを殺せる。殺せるんだよ」

言葉と共に、ぶつりぶつり、と刃が肉を食い込む音がする。つつ、と何かが首を伝う感触がした。ああ、そうか。血が流れ出したんだ。

何色だろうか？ そんなことが気になった。

「だって僕はさ」

勇者と魔女の、息子だから。

意識が真っ黒に染まった。

その4

「……という夢を見てね。それがもうリアルで生々しいの何のつて、やくもう寝起きの気分が最悪だったよ」
あはははは。

最悪という割には爽やかな笑顔で笑う目の前の魔王に、どうしたものかと、まだ10歳になったばかりのルディアスはため息をついた。
どういうリアクションをしるというのだ、全く。

自分はそんなに酷いこと 大切な友人を『魔王』だから、『勇者と魔王の息子』としてあっさりと殺すようなこと をするような人間だと、ケイオスには認識されているのだろうか。やりきれないこと、この上ない。

しかし、部分的には無い話では無さそうだと思ってしまうところは否定できない。

魔族と人の時間の感覚は違う。それは歴然とした事実だ。

今後もしかしたら、ケイオスは何年も来ないかも知れない。そうして自分もケイオスも、お互いの存在は忘れずとも気にすることなく生きていく。おそらくは自分の方が先に亡くなり、その後の長い生を、ケイオスはたった一人で生きていく いつかはルディアスのことも忘れて。

そう思うと、少し寂しい気もする。

と、そこである一つの可能性に思い至る。

もしかしたら、夢の中の自分はそうなることを阻止するためにケイオスを殺しに行ったのかも知れない、と。

「長く生きることは、必ずしも良いことばかりではないわ」

ぽつりと母が呟いた、あれはいつだったか。ルディアスが物心ついですぐ、母の親しかった友人が亡くなったときのことだったと思う。

かなりご高齢で亡くなったその人が母と知り合っただのは、その人がまだ子供の頃だったらしい。その頃から今に至るまで、長寿エルプである母は何一つ老いることも無く、こうしてその人を見送った。いや、その人だけでは無いだろう。もう何十年も（下手したら何百年も？）前から何人も何十人も、見送り続ける。

それはもちろん、これからも。

下手をすれば夫であるルイエだけでなく、息子のルディアスすらも見送るのかも知れない。

そうして自分は一人きりで、長い時間を延々と生き続ける。いつ果てるとも知れない生を。

ケイオス一人が寂しく生き残ることを防ぐため、つまりはケイオスのために夢の中の自分はケイオスを殺しに行ったのだとしたら。

いや、それは流石に無いか。そこまで思い入れるほどに、自分はケイオスという魔族のことを、まだよく知らない。

それに結局のところ夢の中の自分は自分では無く、ケイオスの『頭の中身の投影』なのだから、何を考えているのかなんて分かりっこ無い。

だから夢の中の自分が何故ケイオスを殺そうとしたのかを知りたいのなら、それを考えなければならぬのはケイオス自身だ。

だが一人で長いときを生き続けなければならないというのは、どれほどのことなのだろう

ケイオスはそんなルディアスの頭の中を知ってか知らずか、こう笑った。

「正直な話ボクは、まああそこで殺されても悪くないかなと思った」夢の中でも、自分のすべきことはした。だから、もう終わらせてもいいかな〜と思ったのだと。

長い時間を一人で生きていくのは、結構大変なのだ。

「こう見えて、ボクは人間の年齢にするとかなり高齢なんだよ。魔族の王としては、まだまだ未熟だけどね」

通常の魔族にしたって人間よりは多少は長く生きるが、自分と同じだけ長く生きる存在はいない。やがては自分も一人取り残される…
…魔女のように。

でもね、とケイオスは続けた。

「たとえたった一人になっても、長い時の中でキミたちのことを忘れてしまおうとしても、生きる意味そのものが無かったとしても、出来ればボクは寿命が来るまでずっとずっと生きていきたいと思ってるよ。キミのお母さんのようにね」

キミのお母さんは本当に強い人なんだよ。もうボクの何倍もの時間を、たった一人で生きてる。

笑うケイオスの言葉に、今はまだ理解できないこともありつつも、ルディアスは遠い空の下にいる母のことを誇りに思い、目の前の友人の抱えるものへ想いを馳せた。

何か自分に出来ることは無いのか、幼い頭に思案を巡らせながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2146v/>

睡眠不足ではありません。

2011年10月7日08時22分発行